

登山・登攀の記録

屋久島 本富(モッコム)岳南壁 京都府立大ルート(東稜)初登

日時:1965年5月1日~5月5日

メンバー:OB小山貢、中村旭、他1名

概要:屋久島南岸から一挙に1,000m近く屹立する大岩峰本富岳(944m)の南壁中央部における初登ルート。

OB 小山は50年代からこの岩壁に着目しており十数年越しの制覇。「日本登山史年表」(2005年山と溪谷社刊)によれば、1949年に RCC の西岡一雄が南壁左端の凹状部(中央稜付近か?)を、また 1962年に鹿児島大山岳部が南壁左端中央稜(写真左端スカイライン)を攀じった記録が残る。先行して着手されたこれら南壁左寄りルートはその先鞭を知らぬ小山も現地でルートの可能性を認めたが、以下の記録にも語られるようにブッシュ登攀に終始することを避け、本ルートは偵察の末、南壁中央部直下から取付き、弱点である上部壁・下部壁の境界に右上ラインを求め、東稜に抜けてピークに到ったオリジナルである。屋久島の花崗岩はリスやクラックがほぼ皆無であることからボルトを用いずに弱点を突いたルートファインディングで南壁中央部を初登したことの意義は大きい。以下小山による南の島の自然を楽しみながらの牧歌的な登攀記録。

『十数年前、屋久島を訪れた際に当時未登であった本富岳の岩壁を見、何時かあれを登ろうと思ったものだ。(中略)昔は確かに未登だったこの南壁である。念の為にいろいろ文献を漁ってみたが、不勉強のせい、どうも登攀記録が見当たらない。そこで更に紫岳会の阿部和行氏をわずらわして調べていただいたが不明である。いずれにせよ、「人臭さのない岩登り」が楽しめるから、と例によってパートナーに現役部員を引っぱり出すことにした。こんどの相棒は三回生になったばかりの中村旭だったが、私と同行すると殆んどトップをやらされると聞いてか、何度も岩場ヘトレーニングに行ったらしい。(中略)この山行はのんびりと楽しくやろうということで、準備中からふざけた調子があり、昆虫採集や魚釣りや水泳具まで用意され、相当な荷物となった。』(発表当時の小山の文章から)

記録

4月29日

新大阪発の第一関門で出発。30日8時、鹿児島港発の屋久島丸に乗った。ところが、この船には登山姿の人が多く、ルックザックも30個以上あったのは案外だった。14時過ぎ安房着。昔と同様、ハシケで上陸したが、ストでバスが動かない。やむなくタクシーを奮発、730円也で尾ノ間から約2kmほど手前の本富岳南壁が正面に見える辺りで下車した。勿論、図に出ているような道は無い。そこで開拓作業道路伝いに、とにかく壁に向かって進む。まもなく道も無くなったポンカン畠の傍に天幕を張った。雨量日本一といわれる屋久島だけに水場にはこと欠かない。

5月1日 小雨のち曇

夜中から朝まで小雨がパラついた為、行動中止しプリズム偵察をする。基部の幅が1kmほどもある

この南壁の登攀対象となるべき高さは約400mと判断した。南壁に向かって右半分は上下二段となり、上部と下部との境は大きな一連のオーバーハングになっており、しかも全面的に丸味を持って被っている。下半分は、天幕から見た限りではやや斜度が緩く、数本のブッシュ帯が上に向かって並んでいる。上下の境のオーバーハングは絶望的だが、頂稜右端近くのギャップの辺まで右へ寄ると、ブッシュも続いているように見えるし、上半分の高さも低くなっている。ここがなんとか登れそうである。稜線が右へ落ち込むジャングルの中にすばらしい滝が見えるが、これは南壁の裏側へ東から入っている谷のものらしい。南壁左半分は、左端近くの頂上までブッシュの続くカンテが登れそうであるが、完全な木登りで面白くなさそうだ。その右のルンゼもルートとして考えられるが、半分より少し上

登山・登攀の記録

からは殆んど上まで樹木が続いているので、これもすっきりしない。結局右半分の下部をルートを探しながら登り、上半分は右端近くから稜線に出て頂上へ達するのがよからうということになった。午後、40分ほど歩いて尾ノ間へ行き、入湯料10円也の温泉に入る。イシガケチョウ・ツマベニチョウを採集。尾ノ間方面から南壁を見ると、緩いと思った右下半分もずいぶん切立っているので、これじゃあんまり楽でもなさそうだと悲観する。

2日 小雨のち晴一時雨

八時頃しぐれが止み、見廻りに来たポンカン畠の所有者と話をする。この南壁を登った人は無い筈だという。しかし向かって左端のブッシュ伝いに登った人があったようなことも聞いたそうだ。この地元の人という東洋一大きな“石”に取付くまではものすごいジャングルだが、このジャングルの中にポツカリと草地があり(実は人の背丈ほどのシダ類とイバラが密生し入れない)、それが位置判断の目印になる。畠のおじさんに聞くと、その草地にはサルがよく来るということで、すぐ近くを官民界(官地と民有地の境界線)の道が通っており、右に見える例の滝に通じているとのことだった。そこで午前中は官民界の偵察に行くことにする。滝まで達し、草地の位置を確認。ラン類を採集した。ガンセキラン・エビネ・トクサランなどが豊富である。なお、樹林帯内部は下生えが案外少なく、岩壁まで割合容易に行けそうで安心する。帰途雨でずぶぬれになったが、天幕に着いたら晴れた。午後は海へ行き、暑いのでちょっと泳ぐ。帰りにバスが来たので、また尾ノ間の温泉へ行き、公園の猿と鹿をからかって帰る。

3日 晴

この気象は佐賀地方の予報と一致するそうだが、全くその通りに晴れた。4時起床、6時出発。あれだけ大きな“石”だからと、ハーケン、カラビナ各40ほどを用意する。他にアブミ、捨縄、ヘルメットと、かつてない重装備だ。奥山が鉄類を持ってサポートしてくれる。官民界を1時間ほど登ってからヤブをこぎ、8時20分、サポート終わり、9時岩に取付く。樹林帯の中は見通しが全く利かない

が、出た所は右下部フェイスの左端だった。驚いたことに岩にはホールドもリスもない。岩質は花崗岩だが、遠くから見ると水垢がついて黒いので片麻岩のように見える。手がかりは草付の周囲にしか求められないので、左端の草付を登り始める。途中2ピッチ目でハーケン1本を使用、三ピッチ直上したが、オーバーハング下まで登ったら動きがとれなくなると判断、マキの木を支点に右手のブッシュ帯へ振り子トラバースで渡ることにする。

テトロン11mm×40mを使い、9mm×30mで確保、中村がトップで10mほど離れたブッシュ帯へ渡る。ザイルはぎりぎり40mいっぱいだ。続いて私も渡りかけたが、なんだかうまく動けない。気がついたらザイルの使い方を間違えていたのはお粗末で苦笑する。このブッシュ帯は壁の中ほどの小さなものなので周りはホールドもリスもない岩である。再び右手へ振り子トラバースしたが、今度は短い。3ピッチほどでこのブッシュ帯の上端に達したが、相変わらず岩はノッペラボーで更に右手の小ブッシュ帯への振り子トラバースとなる。奥山との交信によると、見物人が沢山おりプリズムの取り合いで皆楽しそうだったとのことだった。この振り子もザイルいっぱい遠くへ移るので、振り戻されないように途中にハーケンを1本打った。草付の中にだけはリスがあるが、そんな所では役に立たず、これでまだ2本目だ。ビレイの支点にはブッシュにシュリングをかけて支点とした。ここから斜右上へ岩を1ピッチ、同じく小ブッシュと岩を1ピッチで大きなブッシュ帯に着く。下から見るとブッシュだが、立派な樹木も多い。この左端の岩・草付を2ピッチ登ると、下部フェイスの上端となり、安定した草付のテラスがある。頂稜右端近くのギャップのほぼ真下である。この間は各ピッチとも容易。12時30分昼食。下部フェイスの平均斜度は70度足らずだと思われるが、ここまで登ると、南壁中央部のスッキリ落ちたスカイラインと上半部のかぶった岩が威圧的である。ここから頂稜までは短いとはいえ、右上半部になるので急に傾斜が増す。80度を越すだろう。垂直に感じる。ギャップへ続く凹角はオーバーハングの連続ながらなんとかこなせそうに思ったが、もう一

登山・登攀の記録

つ右の凹角を狙う。第1ピッチはブッシュの中ではあるが、あまり急傾斜なのでザックを吊り上げ、2ピッチ目に凹角の下に達する。この部分は体が外へ出てしまうが、しっかりしたブッシュが握れるので安心だった。右端に切れ落ちる稜線も、海まで一目で見降せる高度感と相まって楽しい。さて、凹角の登りは15時頃に始めた。いきなりオーバーハングだが、小さなホールドをたよりに腕力で強引に越す。あとは、ぶら下るようにしてブッシュからブッシュへの木登り同然だ。ランニングビレイ用のシュリングのセットと回収とがもどかしい。4ピッチで稜線へ出る。16時。記念のため、ハーケンをリスに打ち残して出発、下へは7時頃登頂の予定と告げる。頂稜は劔の源治郎尾根に似て、楽しい岩稜だと思ったのも束の間、2ピッチ足らずで裏側のブ

ったが、海面から900m余り突っ立った壁の高度感はいしたもので、変わった味が楽しめた。

(記/小山)

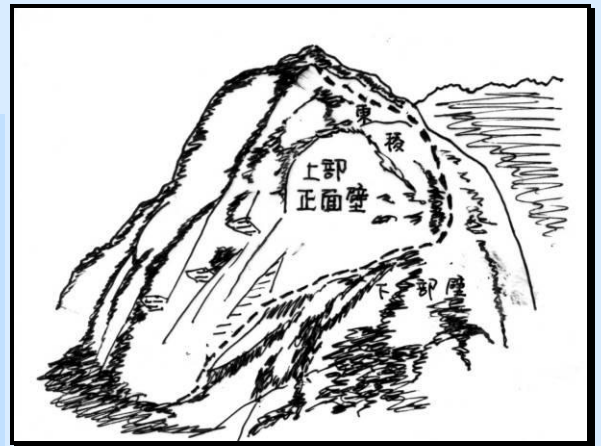


本富岳南壁全景

ッシュを巻かなければならなくなった。後は、所によって岩もあるが、主として裏側をまき気味にブッシュの稜線をたどる。ただこの裏側もブッシュとはいえ、南壁同様、80度の急斜面だから油断はできない。19時頂上着。すぐに降り始めたが、もう暗くなっていたので捗らない。21時頃サポートの奥山と出会い、スープを貰って、帰幕0時15分。

4日

一日海で魚釣り、貝採り。収穫多く夕食を賑わす。登攀としては殆んどブッシュですっきりしなか



破線が登攀ルート